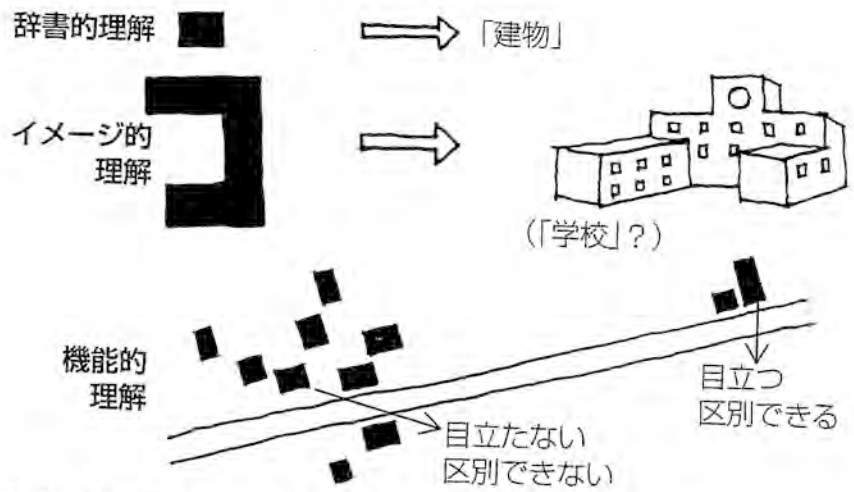


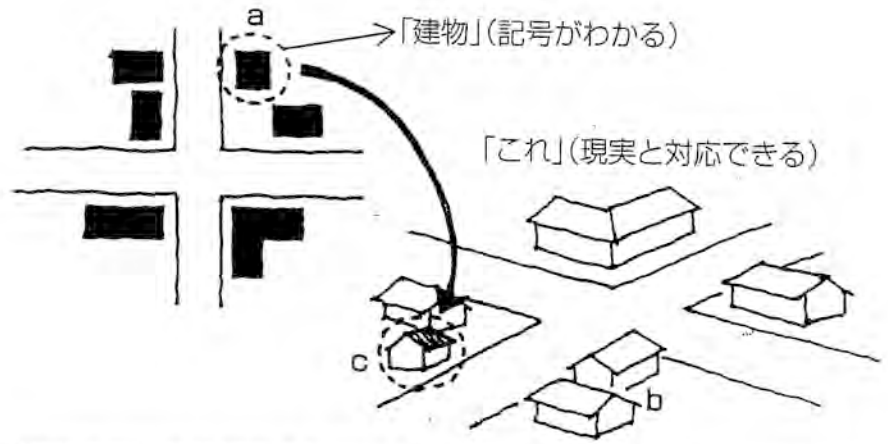
図 = A



イメージ的理解とは、記号化されていない特徴も含めて、記号化された事物の特徴がわかる(推測できる)こと。このケースでは「こんな形をしているから学校かな?」と思うこと。実際には工場かもしれない。機能的理解とは、ナビゲーションにとって重要な対応可能性についてわかること。

図 18 辞書的理解, イメージ的理解, 機能的理解

1B



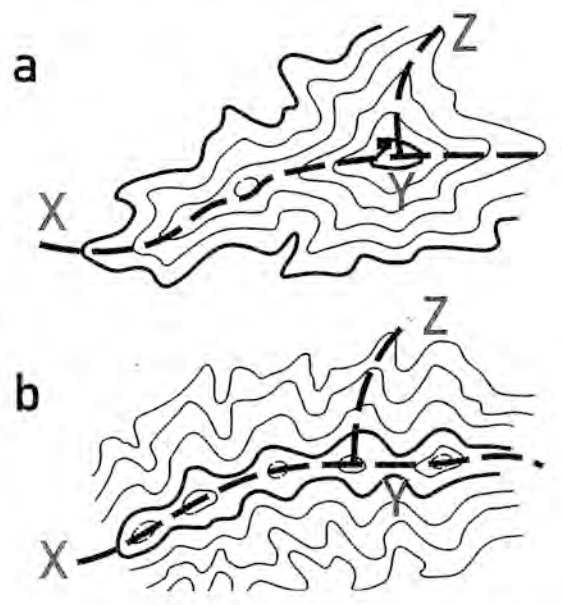
現実の中にある特定の特徴物として同定できることが地図読みには必要。「建物」という理解では、図中のいずれの建物でも対応しうることになる。

図 17 「記号がわかる」と「現実と対応可能」

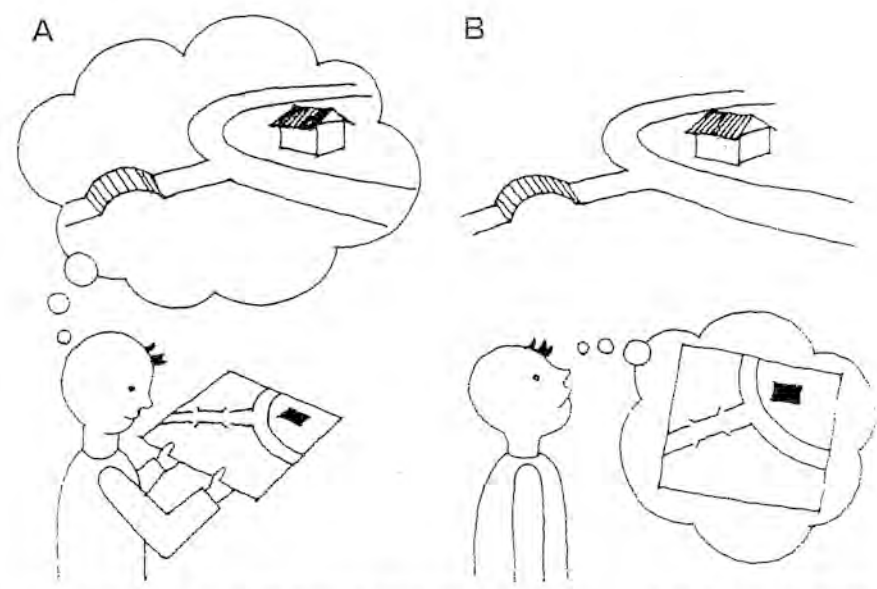
図-2

図-3

図6：現在地把握の必要・不必要性について



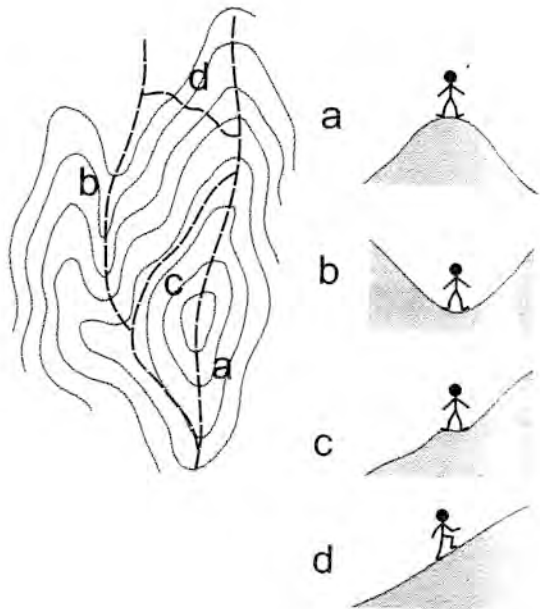
XからYを経てZに向かう似たようなケース、aは下降点が特徴的なので、途中での正確な現在位置把握が不要だが、bでは必要となる



Aは地図を読んで現地の様子をイメージし、それを周囲の特徴と対応させる地図先行の地図読み。Bは周囲を見てその地図表現をイメージする風景先行の地図読み。

図16 2つの現在地把握

図-4



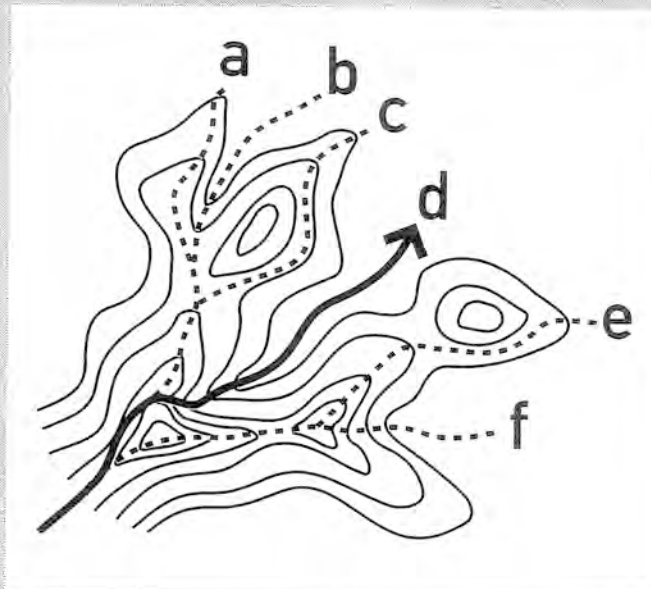
登山道と地形の関係

- a) 自分より両側が低い、尾根道。
- b) 自分より両側が高い谷道。
- c) どちらかが高くどちらかが低い巻き道。
- d) 尾根・谷を結ぶ道

図-4'

問題2

赤い実線ルートをもdに向けて歩く時、斜面とルートの関係はどのように変化するだろうか？



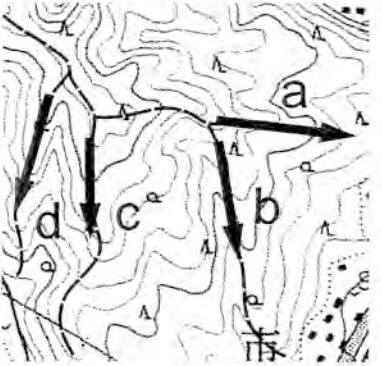
(答えはP197)

図-4''

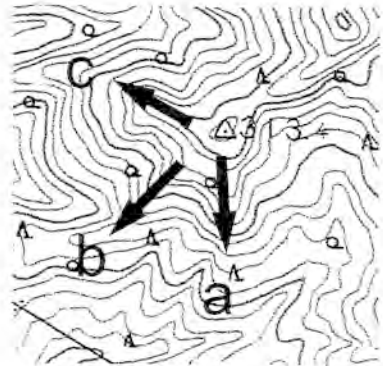


図A

☑-5



☒A



☒B

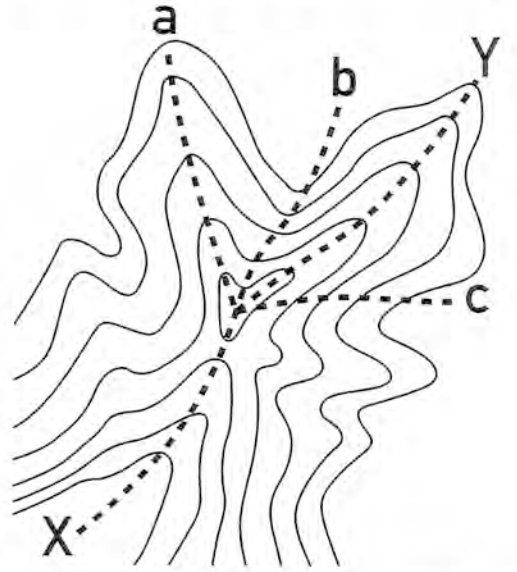
写真 B



空との境に見える尾根の切れ間が谷の方向

☒ 1 6

図5：地形と方向の両方を使えば
たいていの道間違いを防ぐことができる

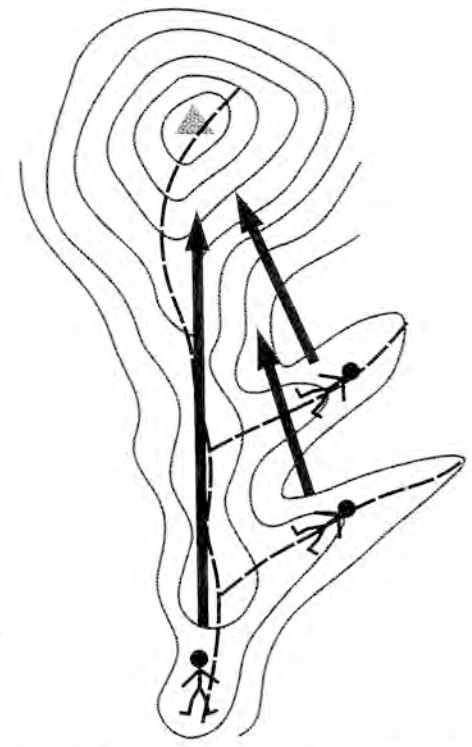


地形と方向の両方を確認することで、Yにいるか
そうでないかを判断することができる

写真 A
図-7



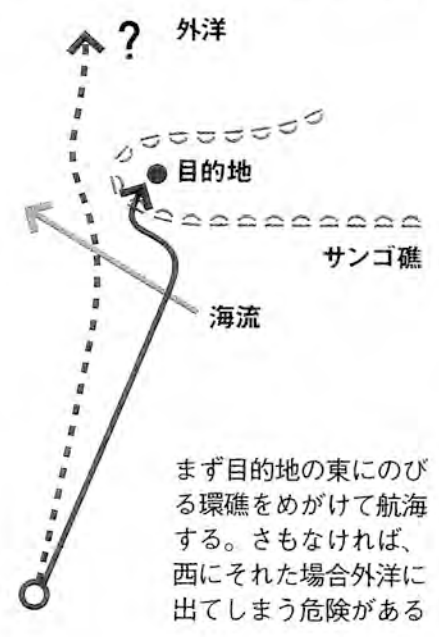
遠くにピークなどが見える場合は、ルート維持のための格好のランドマークとなります



本来正面に見える山が左に見えたら、要注意

12-8

図10：ミクロネシアのエイミング・オフ



まず目的地の東にのびる環礁をめがけて航海する。さもなければ、西にそれた場合外洋に出てしまう危険がある